

民泊体験で子どもが変わる！ 地域が変わる！
自然のなかでの交流と体験で地域を元気に。

「採れたてのキュウリってトゲがあつて痛いんだね」「畑仕事が楽しい！」「夜が真っ暗で車の音が聞こえない」
春から秋にかけての信濃町では、あちこちで都会の子どものうちのそんなにぎやかな声が聞かれます。それは、2011年に町で始まった民泊によるもの。町では東日本大震災を機に、それまで修学旅行で東北地方を訪れていた千葉県の学校の民泊を受け入れ始めました。

「震災で盛んにボランティアが叫ばれるようになり、私も何かやりたい気持ちになりましたが、民泊という協力もあるんだなと思いました。」
こう話すのは、昔ながらの田園風景が広がる信濃町古海地区で民泊開始当初から受け入れを行っている藤本敏正さん。現在、町の民泊の受け入れ調整を行っている「信濃町農山村生活体験受入の会」の会長を務めています。

そもそも民泊とは、読んで字のごとく、旅行者などが一般の民家に泊まること。信濃町では当初、約40軒が学生の民泊受け入れに協力し、彼らが地道に周囲に呼びかけたことで、今では190軒ほどが協力しています。利用者も千葉県から広がり、現

在は年間3400人以上が町を訪問。一家庭の受け入れ人数は3〜4人で、滞在中の過ごし方は各受け入れ先に任されています。農業を基本とする藤本さんの場合は、田植えや芋掘りといった農作業体験のほか、採れたての野菜で子どもたちと料理をしたり、妻の幸子さんが郷土食の作り方を教えたり、近所の神社や記念碑を巡ったり。また、この事業に賛同する近所の「ホテルタングラム」が特別料金で温泉を提供してくれるため、入浴にも連れて行っています。

「信濃町の民泊は農山村での生活体験を目的としていて、町内にはペンションを経営している人もいれば農家の人もいますので、それぞれの生活に踏み込んだ体験してもらっています。」
藤本さんはこうした民泊の受け入れを始めたことで、普段当たり前に感じていた景色や新鮮な空気が、都会の子にとってはとても印象深く感動的に映っていることに気付いたと言います。

「私のもとには受け入れた子どもからたくさんさんの感謝や感動が書かれた手紙が届きます。ある時には『ぜひ学校の文化祭に来てほしい』との手紙をもらい、仲間を誘って遊びに行っ



ただ泊まるだけじゃない。
交流・体験する民泊。

信濃町農山村生活体験受入の会会長
藤本 敏正さん



たこともありました。人と人の絆はこうやって結ばれていくんだなと実感しました。」

古海地区は限界集落（人口の50%以上が65歳以上）と言われていますが、今では地区の15軒が民泊を受け入れているのだとか。

「だから『限界』ではなく、子どもたちが地域を回るような『限回』集落であつてほしい。そう願って、地域活性化のチャンスのを時いている気持ちで、一生懸命事業に取り組んでいます。」

そんな藤本さんが暮らす古海地区に惹かれ、定年退職をした2012年に千葉県流山市から移り住んだ今村政幸さんもまた、民泊を受け入れる一人。実は流山市と信濃町は姉妹都市の提携を結んでいることから、今村さんは移住後すぐに同市の行政に働きかけ、信濃町の民泊を利用するよう促しました。すると、教育委員会会の後押しも得て、今では流山市から受け入れ都市最多の5校が訪れています。

「子どもたちは田舎体験だけでなく、知らない人の家に泊まる体験が初めての子ばかり。だから最初は緊張で顔がこわばっていますが、帰る時の表情は全然違います。人生初のすごい社会体験をここで経験しているのです。」



信濃町農山村生活体験受入の会
信濃町富濃 4152-1
事務局：ぶんぶく亭内 / 026-217-8040

こう話す今村さんも藤本さんも声を揃えるのが「信濃町の魅力は自然」ということ。今村さん宅には中学生の頃に民泊をして自然に魅了され、大学生になった今でも家族や友人を連れて毎年訪ねてくる子がいるのだそう。また、藤本さん宅には「こんなに素晴らしい土地で寝ているのはもったいない」と、朝5時に起きて散歩に出かけた子もいたそうです。

「そんなふうに信濃町の自然に感動してくれる子どもがいるのは嬉しいし、この歳になってそういう経験ができるのも最高にありがたいね。それに、ちよつとズク（やる気）を出すことで自分たちが作ったお米を『おいしい』と付加価値をつけて食べてもらえることも、この上なく嬉しいよね。」

協力家庭の高齢化やインバウンド対策など今後の課題も多いそうですが、それでも藤本さんの満面の笑顔が何よりも民泊の素晴らしさを物語っていました。